

天理参考館

ニュースレター

天理大学附属天理参考館

発行日：2011.3.24

発行：天理大学附属天理参考館

編集：広報普及

第62回企画展

東アジアの古代瓦

— その起源と源流 —

◇会期／4月6日(水)～6月6日(月)
◇会場／3階企画展示室

瓦は日本で発明されたものではありません。日本の瓦は今から約1400年前、飛鳥寺建立のために朝鮮半島の百濟よりやって来た技術者が、瓦の作り方や紋様の施し方を伝えたことに始まります。そのため三国時代の百濟の瓦と飛鳥寺創建当初の瓦はよく似ています。

東アジアの瓦は、さらにその系譜をさかのぼれば中国にたどりつきますが、中国の瓦は紀元前11世紀に興った西周で作られたものが起源です。当初の瓦には紋様がありません

でしたが、やがて軒先に紋様をもつ軒瓦や棟端を飾る鬼瓦などが生まれ、葺を豊かに飾り始めました。軒瓦は軒の先端部分を飾る瓦のことで、丸瓦の列の先端部分を軒丸瓦、平瓦の列の先端部分を軒平瓦とよび、それぞれに長い歴史と独特の紋様をもっています。瓦に表された



朝鮮半島・慶州出土
統一新羅時代 高さ 24.2cm

意匠は時を超え、

やがて現代の伝統工芸にも生

かされるよ

うになります。

今回の企画展

では、当館が所蔵す

る瓦の中から東アジアの瓦を概観し、

瓦の歴史と瓦がもつ紋様の美しさを、考古学と美術史の観点から眺めてみたいと思います。

◇◆◆関連イベント◆◆◆

◇講演会①

「瓦は、いつ、どこで、どのようにして生まれたか」

日時／4月16日(土)午後1時30分から

講師／大脇 潔氏

(近畿大学文学部文化学科教授)

会場／当館研修室

◇講演会②

「歴史情報源としての瓦

— 文様の語り —

日時／5月21日(土)午後1時30分から

講師／上原真人氏

(京都大学大学院文学研究科教授)

会場／当館研修室

第207回トーク・サンコーカン

「東アジアの古代瓦

— 企画展をより理解するために —

日時／4月23日(土)午後1時30分から

会場／当館研修室



蓮華紋軒丸瓦
朝鮮半島

列品解説

講師／太田三喜(当館学芸員)

日時／4月26日(火)・5月26日(木)

いずれも午後1時30分から

会場／当館3階企画展示室

出品資料の紹介

文字紋軒丸瓦



中国・漢 径 17.5 cm

この瓦の正面(瓦当部)には「長楽未央」という文字が書かれています。「長楽」は長楽宮、「未央」は未央宮のことで、ともに中国前漢の都である長安にあった宮殿です。長楽宮は高祖劉邦によって建てられました。次の恵帝が「未央」宮を建設してからは、長楽宮は皇太后の宮殿となりました。この瓦にはこういった歴史を示す文字が書かれています。また「長楽未央」という文字は古くから吉祥文字として親しまれ、「喜びは永遠に尽きることがない」を意味しています。このほかに、朝鮮半島の楽浪土城から出土した「楽浪富貴」と書かれた瓦も展示します。こちらも吉祥文字として古くから知られた文字瓦です。(太田)

第63回企画展

朝鮮半島

くらしの石もの

◇会期／7月6日(水)～8月29日(月)
◇会場／3階企画展示室

韓国、朝鮮半島を自然環境から見てみると「石の国」であることに気づきます。ソウルや慶州の南山や北朝鮮との国境にある金剛山は大岩盤山脈で、その山肌の岩盤がむき出しとなった景観は朝鮮半島の姿そのものともみなされています。

韓国の多くの街は岩の上にあります。人びとは岩山を見上げ、石を踏んで暮らしてきたともいえるでしょう。いにしえより人びとは石を御す術を熟知していたのです。

朝鮮半島で用いられているくらしの石ものには独特の味わいがあります。焼きものや金ものは、陶土などその素材の段階で人の手が加えられているのに対し、石材は地球の歴史がそのままに凝縮されています。しかも木材とはその年寿が違います。

今回の企画展では、朝鮮半島の人びとがくらしの中で用いていたさまざまな石もの約100点を出品し、朝鮮



薬水の玄武形石鉢 20世紀前半 全長 47.6cm



石製四耳釜 朝鮮王朝時代後期 最大径 35.2cm

半島の石の文化の一端を考える機会になればと願っています。

日本のみならず、韓国においてもこれまで「朝鮮半島の石もの」をテーマとした展示は行われたことがなく、今回の企画展は大いに注目されるものと期待しています。

□■□関連イベント□■□

記念講演会

「韓国の石工の技と美」

講師／吉田宏志氏

(京都府立大学名誉教授)

日時／7月16日(土)午後1時30分から

会場／当館研修室

列品解説

日時／7月26日(火)・8月26日(金)

いずれも午後1時30分から

会場／当館3階企画展示室



発掘調査 イスラエルにおける「テル・レヘシユ遺跡⑥」

これまで、5回に亘ってテル・レヘシユ遺跡の調査について見てきましたが、ここで一度、調査隊の組織について説明したいと思います。

調査は主として夏休みの期間を利用して約1ヶ月をかけて実施しています。これまで、立教大学や天理大学・天理参考館をはじめ、慶応大学、同志社大学、元興寺文化財研究所、古

代オリエント博物館、筑波大学、早稲田大学のほか、海外からも韓国の監

理教大学やイスラエルの

ペイト・ベール大学、テ

ルアヴィヴ大学、ヘブラ

イ大学、ドイツのチュー

ビンゲン大学、ハイデル

ベルク大学など実に多くの所から教職員や大学院

生がスタッフとして参加しています。調査はこうした大学の学生たちがボランティアとして参加して、発掘作業を行って

られています。このほか、遺跡の近くのアラブの村からも若者が参加してきて、総勢50名を超える大所帯となっています。

多少のスタッフの出入りはありませんが、こうした体制で2006年の春から、2010年の夏までに6次に亘る調



レヘシユ出土の土面

査を実施してきました。また、レヘシユがアナハラトであるという確証は得ていませんが、これまでに様々な成果があがっています。

前号で紹介した後期青銅器時代から鉄器時代にかけての多数のオリーブの搾油施設の発見もその一つです。このほかに、遺跡の北の下のテラスからは後期青銅器時代から鉄器時代初めにかけての建物群が見つかっているのですが、ここからは祭儀に使用したとみられる複数の器台や土面が見つかっています。

土面は新聞でも報道されましたので、ご記憶の方もおられるかもしれませんが、顔の上半を欠いています。顔の顎のあたりに竹管のようなもので刺突した円形の文様が多数捺されています。少し異様な風貌ですが、これは鬚を表現したものです。出土したときには石灰に覆われて、細部がよく分かりませんでしたが、レモンを搾った汁に付けておくとかなり石灰分が取れて写真のよう

な男前?の土面になりました。この建物群の一面には祭儀との関わりを示す施設も発見されていて、遺跡の北端部が町の重要な祭祀の場であったことが推測されました。(日野)

見所 鏡作神社

磯城郡三宅町にある鏡作神社は鏡作坐天照御魂神社ともいい、古来より鏡鑄造の神を祀る神社として信仰され、延喜式内大社です。延喜式とは、延喜5年(905)、醍醐天皇の勅命で藤原時平らが編纂した律令のきまりのことですが、この中に、国からお供え物を頂くことの出来る全国の神社一覧が記されています(延喜式神名帳)。記された神社は式内社と呼び、鏡作神社はそこに記載された由緒ある古い神社と考えられています。

鏡作神社には鏡が祀られ、これがご神体であるという社伝があります。神社の本殿は幅約7mあり、その中に鏡と共に三社が祀られているそうです。

建物は屋根が反り、庇の一方が曲線形に長く伸びた流造りという様式をもっています。

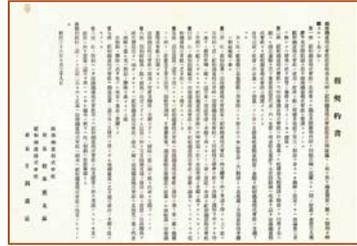
江戸時代中期頃の建築といわれていますが、それ以前のことなど詳細はわかりません。(太田)



鏡作神社本殿

資料 紀和鉄道買収に関する仮契約書

南海鉄道(現南海電気鉄道)は、純民間資本による、現存する日本最古の私鉄です。明治36年に和歌山市まで開通し、紀和鉄道(現JR和歌山線二見〜和歌山間)の和歌山駅との間に連絡線を敷設して、難波〜五条(奈良)間の急行列車の運転を開始しました。



紀和鉄道買収に関する仮契約書 明治36(1903)年10月、縦27.6cm

紀和鉄道は沿線が農村地帯であったため経営が苦しく、大手の関西鉄道(現JR関西本線等)か南海鉄道に吸収合併される情勢でした。当時の経営陣は自社の発展のために合併が望ましいと同年10月に紀和鉄道との契約を締結しました。この仮契約書には一〇九三、五四〇円で紀和鉄道の資産を譲渡する旨を記しています。しかし、不採算会社の合併は会社の損害となると南海株主の一部が反対運動を展開、合併は白紙撤回されてしまいました。紀和鉄道は、その後関西鉄道との合併後、明治40(1907)年に国有化されました。当時、南海鉄道と紀和鉄道の合併が実現していれば、規模が大きくなった南海鉄道が国に買収されていた可能性もあり、現在の姿とは大きく違っていたのかもしれない。(乾)

資料 山吹双鳥鏡

9月30日から11月26日まで、東京の神田にある天理ギャラリーを会場に、「古代日本の鏡」展を開催します。弥生時代から鎌倉時代までの鏡を、一緒に使われたほかの道具類と並べて展示する計画です。今私たちが毎日使う鏡は、ガラスの片面に銀を塗って作ったものですが、このように鏡が使われ出したのは明治時代以降のことです。それ以前の鏡は銅と錫の合金で出来ていました。古代には用途も今のような姿見ではなく、祭りの時に光を反射させるのに使ったり、鏡そのものを財産として大切にしたり、ご神体として祀りたりしました。

この鏡は、背面に花と鳥の文様を表した平安時代には一般的な小型鏡ですが、鏡面に「八幡大芹」の文字が刻みつけてあります。平安時代には八幡大菩薩への信仰が盛んでした。この鏡は、仏の名を刻みつけて仏像の代わりに拝んでいたものです。紐で吊るための2つの孔が開いています。(藤原)



平安時代 径 8.5cm

発掘調査 東西礼拝場の地下を掘る(2)

東西礼拝場地区の発掘調査の結果、古墳時代から奈良・平安時代にかけての自然流路の跡が確認されました。この流路は布留川の支流のひとつで、幅約10m、深さ1〜1.5mあり、東から西へ蛇行しながら流れていました。

流路内からは、おびただしい数の土師器・須恵器などの土器類のほか、木製品が大量に出土しました。特に60点を超える刀や剣といった武器の把や鞘などが注目されます。その中には鹿角製の把を木でまねて作り、全体に黒漆を塗ったものや、直弧文という呪いの文様を彫刻したものもありません。木製の把は一本造りのものや把縁・把・把頭を組み合わせて作るもの、把頭が四角いものや丸いもの、また、鳥の頭のような形をした頭椎形などさまざまです。

木製品は刀装具のほかにも鋏や鋤などの農具や機織りの道具、漆塗りの堅櫛、机、容器などが、当時のままの姿で掘り出されました。木製品がこれだけ良く残っていたのは、埋まっていた場所が流路内で、常に適度な水分があり、有機物が腐らずに残る条件が整っていたからです。東西礼拝場地区から出土した木製品は、それまであまりよく分かっていなかった古墳時代の人々の生活を復元する上で、貴重な資料となりました。(高野)

公開講演会 トーク・サンコーカン

広く一般の方々に当館をさらに身近な施設として利用していただき、諸文化の理解と教養を深めていただくことを目的とする公開講演会です。講演は、いずれも午後1時30分(受付は午後1時)から研修室にて。受講無料(入館料が必要)。

今年度は、企画展開催に合わせ、講演会の開催を予定しているため、トーク・サンコーカンは5月と7月はお休みとなります。

第207回 「東アジアの古代瓦」

—企画展をより理解するために—

◇月日／4月23日(土)
◇講師／太田三喜(当館学芸員)

瓦は日本で発明されたものではありません。今から約1400年前、飛鳥寺建立のために朝鮮半島よりやって来た技術者が、瓦の作り方や紋様を我が国に伝えたのがはじまりです。さらに瓦の系譜をたどれば中国にいってきます。

今回は企画展を楽しく見て頂くために、瓦の歴史と紋様の美しさを、考古学と美術史よりお話し致します。



第208回

「明治のグラフィックデザイン」

—タバコパッケージにみる世相—

◇月日／6月25日(土)
◇講師／中谷哲二(当館学芸員)

明治時代のタバコの包装パッケージやポスターなどにはさまざまなグラフィックデザインが意匠を競っています。

この広告画像でもあるグラフィックから、明治時代の世相風俗をのぞいてみます。



第209回

「台湾先住民パゼツへ(巴宰族)の移動経路」

—台中・埔里—

◇月日／9月24日(土)
◇講師／早坂文吉(当館学芸員)

当館は台湾先住民の一つ、パゼツへ(巴宰族)の人々が残した古地図を収蔵しています。パゼツへの人々は、18世紀に中国から多数の漢民族が台湾に押し寄せたことにより、台湾の奥地に移住を迫られました。

古地図に残された地名を頼りにフィールドワークを行い、その移動経路を辿ります。

第210回

「パゼツへ(巴宰族)の旧首長潘氏」

—族の故地、岸裡旧社の現状—

◇月日／10月22日(土)
◇講師／吉田裕彦(当館学芸員)

パゼツへ(巴宰族)の人びとの多くは現在、南投県の埔里盆地に居住しています。しかし、彼らは17〜19世紀の頃、台中県の豊原や神岡付近に暮らしていました。その中心地であった岸裡旧社には当時の首長であった潘氏一族の後裔が残っており、当時の面影を今に伝えています。

ここでは、その岸裡の地の現状を紹介します。



「おしらせ」 「国際博物館の日」

毎年5月18日を「国際博物館の日」と定め、地域住民の幅広い参加を得て、博物館の存在理由を全世界の博物館とともに、それぞれの地域社会にアピールする機会として開催されています。

当館は、この趣旨に賛同し、5月18日(水)よりご来館された方々に、記念品を配布する予定です。なお、記念品が無くなり次第終了させていただきます。

利用案内

開館時間 午前9時30分〜午後4時30分
(入館は午後4時まで)

休館日 毎週火曜(休日の場合は休日後の最も近い平日)

ただし毎月25日〜27日、4月17日、19日、7月26日〜8月4日は開館

創立記念日(4月28日)

夏期(8月13日〜17日)

年末年始(12月27日〜1月4日)

入館料 大人400円、団体(20名以上)300円、小・中学生200円(※)

※学校単位の団体は無料。事前申込要
交通 電車/JR桜井線天理駅・近鉄天理線
天理駅下車 南東へ徒歩約30分

車/西名阪道天理ICから国道169号線を

南へ約3km 駐車場あり(無料)

その他 団体見学は事前にご連絡願います

世界の生活文化と考古美術の博物館

天理大学附属 天理参考館

〒632-8540

奈良県天理市守日堂町250番地

Tel 0743-6318414

Fax 0743-6317721

URL <http://www.sankokan.jp>

携帯電話のサイトから情報をご覧いただけます



編集後記

このたびの東北地方太平洋沖地震で被災された皆様に、心からお見舞い申し上げますとともに、被災地の日も早い復興をお祈りします。(片山)